

歌謡研究の重さと切なさ

日本浪漫学会として敢えて歌謡曲研究を中軸の一つに置いたには訳がある。いつの時代も人の心は大曲によりも、詠嘆する小唄に潜在するからである。

音楽を取り巻く世情というものは大別して二つに分かれる。高級志向はクラシックを尊びフルオーケストラを上位に位置付けて歌謡曲には見向きもしない。だが世俗的として見下される歌謡曲こそ、気取らない人間の本性が切々と籠められていて、全体として立派な歴史の証言者に成っている。

またこんな側面もある。

百年も前に作られた歌がなぜ現代人の心を捉えてはなさないのか。その歌謡文化が時代性を担っているからか？ ノスタルジアだけか？ いや違う。

歌謡の詩と旋律はいつの時代にも通じる本質的情感を備えている。歴史的に生き残った歌の研究はだから価値がある。だが、その研究事例を見ると、とかく時代背景

の研究になりがちである。作者の過ごした時代性やモデルになった人物を特定したがる。だが歌だけを聞いて感動する大多数の人々にとって、もっと大事な事は、巧みなレトリックで語られ醸し出された心の叫びである。わが学会はそれを研究する。創作者の視点で。

若者よ。君たちは知っているか、激しい旋律と共に絶叫した歌のほとんどは短命で消えて行き、何十年も後になっても歌われる歌は、たいていユツクリした切々たるバラード調であることを。詩の世界をじっくり味わえる歌。それが発売直後から人心を虜にするのである。

日本浪漫学会としてはこれから歌の詩を書こうとする若い諸君のために、本物の歌謡の神髄というか作詞の神髄はこれだと提示するから、どうぞその持ち味を学んでもらいたい。本学会がこの項目を設けたもう一つの目的はこれである。諸君、自作の歌もどうぞ応募されたい。

2022年12月25日

日本浪漫学会会長 濱野成秋

副会長 河内裕二